

第1章

夕陽丘の歴史と風景

江戸期の夕陽岡

二子道（今の目黒通り）は、夕陽岡から行人坂の急坂を下り、太鼓橋を経て目黒不動に至る。

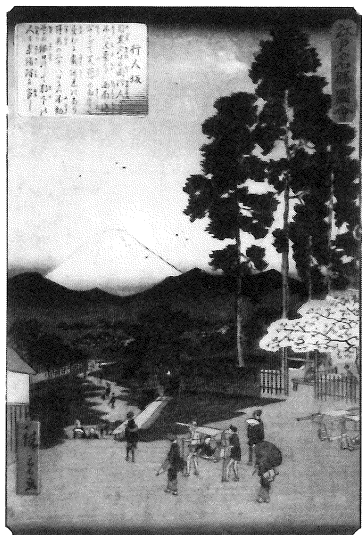
江戸中期頃から、目黒不動詣では賑わいをみせ、永峰町（上大崎四丁目一番の旧三井銀行跡地）周辺には町屋が発達した。当時、夕陽岡からの富士の眺めは素晴らしいものであったらしく、ここの富士見茶屋は江戸名所として有名だった。

ここは夕日に染まる岡——夕陽岡と言われており、これが町会名である夕陽会の謂れとなっている。

行人坂を下っていくと、左中程にゆかりの大円寺、そして夕陽岡の峰から目黒川に至るところは、肥後熊本藩の細川越中守（五十四万石）の武家地である。当時、雑木林に武家屋敷が点在していたものと思われる。細川武家地に隣接して、上大崎村（上大崎四丁目六番、西五反田一丁目あたり）が続く。



富士三十六景
「東都目黒夕日か岡」
歌川広重（初代）



江戸名所図会
「行人坂」
歌川広重（二代）

今の西五反田三丁目の青果市場跡地周辺には、大和柳生藩の柳生但馬守（一万石）の下屋敷があった。細川、池田、島津などの外様大名の武家地に柳生家の下屋敷を配置したのは、徳川の安全保障であったのであろう。

（金武典夫）

夕陽丘を歩く

小史を作ることになってから、町内を歩くといろいろと気づくようになった。古地図・家並み図をながめ、先輩の話などを思い出しながら、移り変わりを偏見も交え、断片的に記してみたい。

古地図

江戸中期の古地図によると、ドレメ通り西側が肥後熊本藩・細川越中守（五十四万石）の武家地であり、東側は上大崎村もしくはその入会地であったことが分かる。しかし実際、江戸、明治、昭和、現代の地図を見比べてみると、この辺りで一致するのは唯一、大圓寺とその前を東西にはしる行人坂だけだ。

明治時代まで目黒川は蛇行しており、権之助坂は細く描かれている。上大崎村と武家地の境界線がドレメ通りと重なるが、明確に道として地図に現れるのは明治も終わりの頃だ。



行人坂

古地図上に大圓寺より大きく、紅葉の名所として描かれているのが「明王院」。目黒雅叙園にあたる場所だが、明治初期に起こった廃仏毀釈の嵐のなか、廃寺となった。幸い大切な仏像は「大圓寺」に引き取られたという。

その昔、大圓寺が火事になったとき、目黒川に沈めて難を逃れた秘仏が長く明王院に預けられていたのも何かの縁か。明王院の跡は岩永裕吉邸（二万坪）となり、昭和初期、岩永邸の一部をも再利用しながら、「目黒雅叙園」がオープンする運びとなる。

岩永氏本人は丘の上に住み、その本宅は農林中金目黒分室に、離れは椎野、そして書庫は玉木（現佐藤）となった。

セツトバック

私は、朝早くドレメ通りを歩くのが好きだ。けっして整備されているといえないし、歩道も完備していないが、しかしどこか落ち着いた雰囲気がある。その理由のひとつは、いつも綺麗に掃き清められているからだろ。企業、学校はもちろん各家庭がドレメ通りと路地を、毎朝掃除し



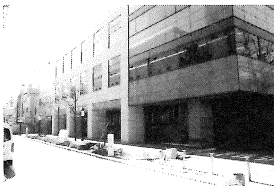
大圓寺

ているからだ。学生や勤め人が大勢歩いた後の夕方もそんなに汚れてはいない。タバコのポイ捨てもめっきり減った。

二つ目の理由は、道に迫った建物が少ないからだ。マンションの走り「南目黒苑」は一九六八年に竣工している。ビルの高さ制限三三メートルしかなかった時代で、当初の計画図面は道から切り立っていたそう。町会の先輩たちが交渉し（住民パワーというか）、道路側を斜めにカットし目線が確保されたという。

通り入り口にある「三井住友新目黒ビル」は、用途指定住専二種だった品川区と商業地指定の目黒区にまたがって建っている。やはり当初は通り側も高く計画されていたが、町会の申し入れによりセットバックしてもらったという。そしてハナミズキが植えられ、「めじろ」のモニュメントがやさしく迎えてくれる。

最近の特筆はドレメ本校舎から記念館前の歩道整備だろう。わずか長さ五十メートル余、幅二メートルだがほっとする空間が演出されている。控えめな黒の鉄格子に沿った赤目の生垣とさつきの植え込みが嬉しい。



三井住友新目黒ビル

南目黒苑



泰山木

さくら情報システムの北側の歩道辺りに、敗戦前後「ヤオリン」を含め商店が三軒あったそうだ。その後「三越百貨店」の荷捌き所・テニスコート・駐車場とめまぐるしく変わった。一時ゴルフ練習場となった「住友商事」の保養所（貝島邸）などを飲み込んで、コンピュータセンターが造られた。この辺りは地盤がしっかりしているからだ。

この建物の西側を通行人はなにげなく歩道として使っているが、もともとは、「旧三井銀行東京事務センター」のコンピュータから打ち出されるプリンターシートの荷捌き停車スペースを、地元に解放してもらっているのだ。

歩道のところに街路樹としては珍しい泰山木が三本ある。真ん中の一本はもともとお屋敷の庭木であった。泰山木はそのまま残されただけでなく二本増植され、街路樹としての形が整えられた。細かった二本も成長し、おかげで梅雨時には大きな白い花を楽しみむことができる。角の立派な掲示板を含め、町会の先人たちが強力に交渉した結果に感謝したい。



泰山木

「めじろ」のモニュメント



お店

この通りは企業、学校、マンションそして戸建が混在しているが、「香港園」は別格として物販のお店はあまりはやらないようだ。洋裁材料販売の「糸高」がドレメの生徒を目当てに権之助坂から本格的に越してきたのは一九六六年のことだ。今では権之助坂の本店を閉め顧客を絞り込み、この通りで営業できる数少ない専門店といえよう。宅急便の取り扱いは重宝している。紀クリニクの奥のマンションフラワーヒルの一階にいつの間にか営業を開始したのが、フィリピン食材・雑貨の「CORA」である。ここは日本語教室、歯医者などよく変わったが、今回は顧客が限定されており、日曜日礼拝の後はいつも混んでいる。

マンショングリーンパームの角、不動産紹介業の「山手興産」が入っているところは、手作りチョコレート屋「サン・スーシー」、サンドイッチと紅茶の「ピクトリアハウス」と続いたがいずれも赤字で撤退。その後、コンビニからの熱心な申し込みがあったようだが、深夜に及ぶ騒音を嫌い、大家さんが貸さなかったという。

教会前の靴とバッグの「KOGA」は若者向きの品が多い。ときどき



CORA



紀クリニック

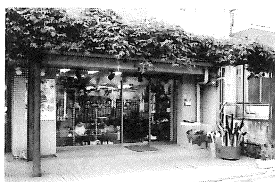


糸高

端切れがおいてある。聞くとやはり顧客はドレメの先生と生徒が多いそうだ。昔、「ドレメパーラー」のあったところといっても、覚えている人は少ない。一九九八年に開店したフランス料理の「ARCACHON」は、味がいいのでファンが遠くから通って来るといふ。もともと「アカシア」が布地とクリーニングの取次をしていた店だった。クリーニング店のその前は、やはり生地専門の「ミノリ」だった。その隣の「喫茶ベア」は通りで一番古い飲食店で、一九七六年から続いているから立派だ。目立たないこじんまりした店だが、昔の洋食屋さんを感じさせるオムライスなどいかが。



山手興産



KOGA



喫茶ベア



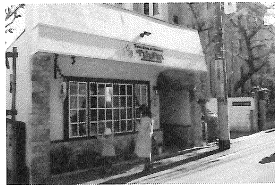
ARCACHON

ガレージを改装し店にしたアクセサリを扱う「Juwelly Doreme」がある。杉野の先生が工房として使用され、ときどき作品展示販売や学生作品を参考展示している。レストラン「パリス」の跡が「アップルマート」。その後、開業したテイベアの手作り部材専門店「プリメーラ目黒」は、二〇〇五年九月開店ほやほや。第三校舎の半地下に集約された「アップルマート」はお弁当が豊富。またコピー機が二台あるので必ず使える穴場だ。一般の方も自由に利用できる「ドレメ購買部」には、生地や糸が豊富に並んでいる。ソーイングマシン（ミシン）の販売が行われており、缺の研ぎを受け付けてくれるのも珍しい。場所は本校舎の右奥。

グリーンパームの路地の三軒目に「祖父江歯科」、目黒パークマンションには「雅叙苑クリニック」の名で鴻田先生が小児科を開業している。いずれも雅叙苑マンションから越してこられた。新田中邸の一角MTビルにある「目黒駅前メンタルクリニック」の登場は比較的近年で、メンタルな面を意識してか目立たない看板だ。そうそう、南目黒苑には「石田内科神経科クリニック」、KOGAの隣の「ギャラリーU」には「ド



祖父江歯科



プリメーラ目黒



アップルマート

レメ歯科」があった。うっかり「玉木小児科」を忘れるところだった。

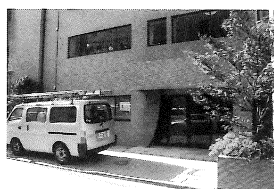
ヘアサロン「ATTIVO」は目黒パークマンションにある。雅叙園マンション内の古い美容院「LOOP」（旧雅叙苑美容室）には、昔このあたりに住んでいた人が今も通ってくる。昔といえば、農林中金手前松井邸のところに、畳の部屋で営業していたパーマネント屋「ボン美容室」があったという。パン屋の「デルダン」は、旧竹島邸の一角、街路樹のハナミズキ並木辺りにあったが、地上げにあつて目黒三田のほうに引越したらしい。

ロケ

現在のグリーンパームの所に「翠松閣」があった。戦前を代表するような木造二階建モルタル仕様の典型的な高級賃貸アパートで、土地を贅沢に使い一周できる庭、中庭を挟んでシンメトリに建っていた。ところが年月を経て、モルタルは剥げ、廊下もきしみ、庭はジメジメ、見る影もない状態になった。そこに目をつけたのが映画やTVのロケ班。周囲にスペースがあり、二方が道路。カメラを引く距離が十分あったからだ



ATTIVO



目黒駅前メンタルクリニック



雅叙苑クリニック

ろう。使われ方は、犯人の隠れ家などに使用され、あまりいい印象は残っていない。

一方、ドレメ本校舎は今も〇〇警察署などとして、ときどき撮影に使われている。石段の上に警官が立ち、パトカーが乗りつけるシーンの撮影にはもってこいだ。第三校舎や杉野記念館も含め、余計な看板はないし、前庭に機材も置け格好のロケ地ようだ。撮影のときは町名が一変するから面白い。電柱に架空の町名番地が張り出され、広告まで用意され、ドレメ通りは映像の中に別の町としてスリップする。

お屋敷町

昭和の初めに土地が分譲されたときは、一区画数百坪単位だったそう。山の手線の駅からこんなに近いので、ビルやマンション・校舎になったのは致し方ないが、お屋敷町の雰囲気だけはなんと残っているような気がする。その面影を色濃く残している個人の家は、なんといつでも塚田邸だろう。今は敷地内に六軒建っているが、それでも庭や私道に余裕があり、かつてのお屋敷六百坪の広さを髣髴とさせる。

ドレメ第三校舎から雅叙園マンションの入り口にかけて武家屋敷の土塀を模した瓦屋根の厚い塀が続いている。一九四一年の地図に個人宅として川崎邸とともに名前が載っている高橋是清の息子、高橋是賢邸の名残だ。

昭和のレトロな感じがよく出ているのが杉野邸（記念館）だ。中に入るとむくの木のパローリングやステンドグラス。グラスの入った木のドアもずっしり重い。杉野芳子先生のモード展示に取り囲まれ、木製階段がゆったりと二階に導いてくれる別世界（随時誰でも入れます）。

旧田中（松雄）邸も記憶の中に活きている。現在の場所より駅よりにあった木造二階建ての家はよく手入れされた松とバラ、木枠の窓ガラスと雨戸の組み合わせがしっくり溶け合い、落ち着いた風情を漂わせていた。まわりが地上げされ室町運輸の看板のかかった空き地になったため、長い間孤高を保っているように見えた。住心地はいざ知らず本当に壊すのが惜しい昭和の和風建築だった。

戦前からこの通り沿いに住み続けている家族は少ない。時代変化と戦いながら、今もおられる方々を北から列挙してみる。昔の洋館の雰囲気

を引き継いでいる川崎氏、元野沢邸跡に移動した田中（松）氏、新日本ファスナー（株）の與倉氏、自宅を記念館として隣のマンションに住む杉野氏、目黒オーケービル併設の奥村氏、豪邸分割後の中央に位置する塚田氏、住居表示が目黒区下目黒の田中（稀）氏、車が目立つ植木氏、昔ながらの庭を維持されている金武氏、そして最近二世帯住宅にされた嶋田氏ぐらいか？ そういえば、ブラジル帰りの椎野氏もぎりぎり戦前派だ。昭和十年代には、この通りに住んでいる人物だけで、「内閣が組閣できる」くらいだといわれた多くの人たちが、どこへ越されたのか半分以上分らない。

石燈籠

戦前のお屋敷の庭には石燈籠がよく似合ったようだ。杉野学園が校舎や寮のためにお屋敷を譲り受けると、燈籠が集まってきたとのこと。田中邸の玄関左脇をはじめとして、通りから覗いてみよう。

学生会館北桜・夕陽ヶ丘にもあるが、司祭館の中庭にはノミ跡も荒々しい四本足の灯籠がある。記念館には合計四基、なかでも雪見燈籠の形

が優美だ。博物館の左手坪庭の隅に一基。右手には燈籠ではないが、水戸光圀作成依頼という葵のご紋入りの由緒正しい銅製の塔がある。その横には年代を感じさせる水鉢が水をたたえている。後は塚田邸駐車場の後ろに一基。金武邸には、春日灯籠と月見灯籠があるようだ。

町内ではないが、雅叙園の入り口から太鼓橋の間に三メートル以上はあろうかと思える大きな石燈籠を含め合計四基。桜並木によく似合う。

話し変わって、小さな稲荷神社が本多電機の道路側にある。立派な銅葺き屋根に建て替えられときの神事は、五反田の「雉の宮」の神官が行ったとのことであるが、由緒が分からない。一九一〇年ごろの地図に記載がなく、一九四一年の地図には雑木林の中に鎮座している。

マンション

一九六〇年代中頃まではまだまだ一般民家がたくさん残っていた四丁目も、後半になると第一次マンションブームが町に押し寄せた。象徴的なのはなんとと言っても「雅叙苑マンション」



雅叙園マンション

本多電機の側にある稲荷神社



だろう。朝日建物が雅叙園と本多電機から土地を譲り受け、華々しくマンション建設を発表したのが、一九六八年頃。当時としては珍しい全館集中冷暖房・プール付など高級仕様の大規模開発で、一般サラリーマンには手の出ない今でいう億ション相当であった。

ところが結構若い夫婦も入居し、まもなく子どもの歓声が聞こえるようになった。屋上プールは有料ではあったが地元にも解放され、町内の子どもとお母さんたちを交え賑わっていた。水漏れがあり残念ながら閉鎖された。

子どもといえば、「聖アンセルモ目黒教会」(現カトリック目黒教会)に「アンセルモ幼稚園」が併設されていた。名門幼稚園として有名で電車やバスで通ってくる園児もいて、増えた地元の子どもが入園できない事態もおこるほどだった。その後、急速に町内から子どもが減り、幼稚園も閉園となった。ちなみに、町会の二〇〇四年度の新小学一年生は九名、二〇〇五年度は六名である。

マンションに話を戻そう。一九六八年に八〇世帯の「南目黒苑」(稲葉邸)、「雅叙苑」は尾崎邸・細川邸を買い取り、ドレメ通りからのアク

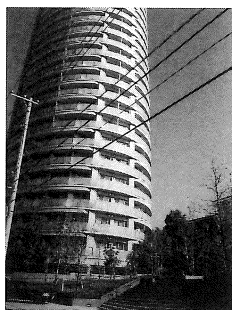


聖アンセルモ目黒教会

セス問題が解決し着工。一九七〇年の秋にA棟（一号棟）が完成、最後の二号棟を含め五棟・世帯数約四百。七〇年代は「目黒パークマンション」（今井田邸）、「フラワーヒル目黒」（紀病院）、八〇年代は「目黒芙蓉ハイツ」（長野邸）、「セレニティ目黒」（牧野邸）、「グリーンパーム目黒」（翠松閣）と続き、バブル崩壊とともに一段落。

西五反田三丁目地区は、鉄筋コンクリート造りの東急社員アパート、国鉄アパートが立ち並んでいたため、マンション化は一代代ずれて始まった。一九九五年に「ラビ目黒」、二〇〇四年に「ドレッセ目黒インプレスタワー」（約一二〇世帯）が、免震構造で建設された。もともと東急社員アパートが建っていたところだが、目蒲線地下化の工事に伴い、工事関係者の一時宿舎、資材置き場として使われていた場所である。二〇〇五年十一月から八棟あった国鉄アパートの取り壊しも始まった。

ところで、この町会には山車や神輿がない。お屋敷町で子供が少なかったせいだという。



ドレッセ目黒
インプレスタワー



目黒芙蓉ハイツ



目黒パークマンション

しかし国鉄アパートにはかつてたくさんの子供がおり、長者丸（二丁目）の子供神輿の担ぎ手として、何十名も応援に行っていたそうだ。そういえば私の子供たちもドレメ通りを中丸（三丁目）の山車を一緒に引いていたのを思い出した。山車を引く子供たちの歓声が聞こえなくなつて、二十年ぐらい経つたらうか。

そのほか、木造の「東荘」、下目黒の「目黒パークハイツ」、西五反田三丁目にありながらその名もずばり「目黒マンション」など、中小型のマンションや個人住宅に併設の集合住宅も数多い。

夕陽会のテリトリ

現在夕陽会の一部を構成する西五反田三丁目北側の一角の住居表示が、上大崎四丁目から変更されたのは、一九七〇年代後半である。江戸中期の地図によると、さくら情報システムの建物の東側から昔の目蒲線のガード下をくぐり抜ける道が、そのまま南東に伸び山手線を横切り花房山通りに続いていたことがしっかり描かれている。すなわち、上大崎村と播磨三日月藩森伊豆守の武家地（花房山一帯）を分けていた。一方、

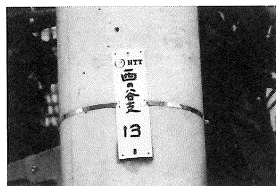


三井住友銀行前の通り

上大崎村の南は大和柳生藩柳生但馬守の武家地（元荏原市場、現大崎第一地域センター）と接しており、江戸時代の区分がほぼそのまま現代まで引き継がれていたことが分かる。東急目黒線が街を分断しているが、町会のテリトリーは歴史を色濃く残しているわけだ。

明治の終わりごろ、ドレメ通りの半ばまでに建物が十軒ほど散見されるが、その他は広葉樹と針葉樹の混交林だったようだ。そのころ、四丁目一帯は「荏原郡大崎町（大字上大崎）字西ノ谷」と記されている。今も電柱の上の方に古い管理番号「西の谷」の文字が読み取れる。江戸時代の入会地・田畑の分布や永峰通りから推察すると、上大崎村の中心は、今の上大崎交差点より東にあり、現西五反田三丁目辺りは「西の方にある谷」と認識されていたのではないだろうか。その延長線上にある丘の上もついでに西の谷になったのだろう。

昭和の初めに藤山雷太氏が宅地分譲を開始し、坂が始まる金武さんの向かいの田中さん（現外国人向け貸家）あたりまでが、戦前の住宅地だった。戦後、雑木林の傾斜地を開発し本多電機までの間も宅地化された。目黒区下目黒一丁目の一部は目黒川と雅叙園に遮られ、目黒区側からア



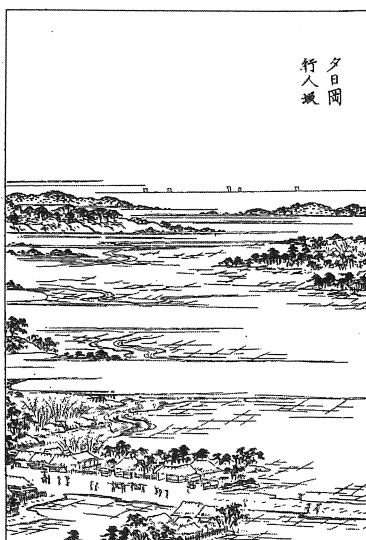
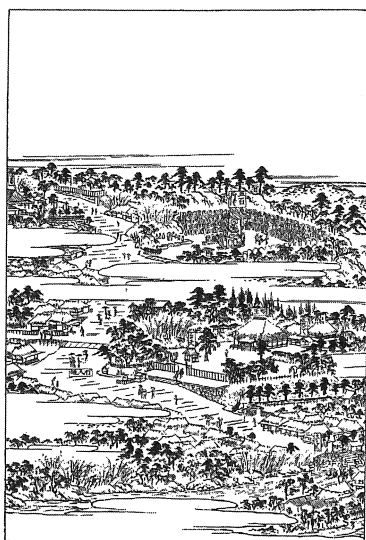
電柱の古い管理番号



大崎第一地域センター

クセスできないため、行政から見ると一種の飛び地だ。したがって、戦争中の配給は特別措置として品川区から受けたという。また近年、品川ケーブルTVに加入するのに、申請してから目黒区と品川区の話し合いに三年を要したそうだ。地域社会としては完全に四丁目であっても、国勢調査などの行政では下目黒として扱われる。こんなところにも行政の無駄が見える。品川区と目黒区の境界線は、細川越中守の武家地を逆L字型にほぼ直線的に分断しており、残念ながら理由が推定できない。

(佐藤至弘)



夕日岡
行人城

川田 壽「江戸名所図会を読む」東京堂出版より

目黒駅の変遷

「〇〇時、目黒駅で会おう」と簡単に約束し、目的地近くに来たら携帯電話で連絡を取り合っつてドッキングする近頃の人たちにとつては、目黒駅(品川区)はひとつであろう。現在の目黒駅は見かけ上二つであるが、詳しく記すと、JR東日本(山の手線)と東急(目黒線)、東京メトロ(南北線)、東京都交通局(三田線)の四駅である。

この形が完成したのは比較的新しく、二〇〇〇年(平成十二年)九月二十六日、目黒線と南北線・三田線が相互乗り入れを開始した。この日は、都心に直結する地下鉄がなく取り残された気持ちを持っていた目黒駅周辺住民の長年の悲願が、かなった日でもある。

最初の目黒駅は、一八八五年(明治十八)年、私設日本鉄道品川線(品川―赤羽)の途中駅として開業されたが、当初は大崎あたりから目黒川に沿って今の山手通り辺りを北上し、権之助坂新橋・大鳥神社辺りに駅を作る計画だったという。近隣の公害反対(蒸気機関車の排煙)で、現

状のように五反田から恵比寿に向かって直線的に、少し東側をえぐるように変更された。

その結果は、白金棧道橋から長者丸と目黒三田、J R東急目黒ビル小公園から花房山と夕陽ヶ丘方面を見ると、おのおの山裾を削って切通しのようになっているのがよくわかる。ちなみに、山手線が環状運転され今の形に近くなったのは、一九二五年（大正十四年）のことである。

一方、現在の東急目黒駅は、一九二三年（大正十二年）、目黒蒲田電鉄目蒲線（目黒↷蒲田）の出発駅としてスタートしている。現在（二〇〇四年度）一日の利用者数は、東急側で約二十万人、J R側で約十万人といわれているが、駅周辺のビジネスマンが増えた結果であろう。

都電5系統は、目黒駅から魚藍坂經由永代橋まで続いていたが、一九六七年（昭和四十二年）に廃線となり、車庫跡は都バス車庫として再利用されている。車庫敷地内には都電時代の石畳がわずかに残されている。そのころの駅前には、三田用水の導管が駅近くの山の手線を横切っ



東急目黒駅（1950年、昭和25年頃）

ており、目黒通りは都電の線路を除くと片道一車線、歩道の整備も十分でなく、車庫や東急バスの転轍機があり雑然としていた。

特に木造の目蒲線目黒駅は管理もおおらかで、時間に追われた学生が駅の改札を通らず、今の紀の病院の東側あたりから駅ホームに入れたそうだ。

開通当時のとんがり屋根の駅舎は空襲で焼け、その後、二階建てのビルとなった。一階はホームと三菱銀行目黒支店、二階には東横食堂（東横デパートの食堂部門が出店、現在の東急百貨店）、地下には東横ストア（東光ストア、東急ストア、プレッセと変遷してきた）が入り、都会の息吹を感じさせていた。

新権之助坂ができて一方通行となり、駅前広場にバス・タクシー乗り場が整備され、現況に近づいた。

（佐藤至弘）



目黒駅西口交差点（1989年）写真家 長野重一氏提供

香港園

香港園は現在の社長王忠の父である王伝熊が一九五四年（昭和二十九年）に上海から日本に渡り、川崎男爵から昔の洋館ならびにその周辺の庭を借りて始めた店です。

当初は香港クラブという名前で上海から香港経由で日本に来た華僑の宿泊施設でしたが、その一年ほど後に初代料理長の陳建民を迎えての中国料理店・香港園として営業を始めました。夏には庭園を利用してビアガーデンをしていました。芝の庭園では周りの木々に囲まれ、各テーブルの下に蚊取り線香が焚かれ、正面には和の建物、その後ろに洋館があったのは皆様の記憶の中にもあるのではないのでしょうか。おそらく日本で最初のビアホールレストランとして楽しんでいただいたと思います。

いろいろな結婚式も行いました。お客様の中には皇室の方々や財界、政界の方々など、たくさんご利用いただきました。また、開店当初から三代、四代といらしてくださるお客様も珍しくありません。中には「香

港園でお見合いをして、香港園で結婚披露宴を行い、今日は息子夫婦と一緒に食事をしに来ました」とおっしゃるお客様のお話を聞くこともあります。

目黒にはいろいろな方が住んでいました。今は日本各地や海外に移住した方も多く、日本に

帰ってきた際には香港園に食べに来られ、以前ご自分のご家族と来られたことを思い出して懐かしむお客様もいらつしやいます。

一九八四年（昭和五十九年）には新目黒ビル（現在のさくら情報システム）を建設するのに伴い、香港園は元の場所を立ち退き、以前の敷地内の駐車場と行人坂に面した崖の部分を利用して現在の香港園が建てられました。

昔の建物よりモダンなデザインになった店内には、現社長の祖父・王一亭（ペンネーム白龍山人王震）と呉昌碩の水墨画がいたる場所にあり、



なかには二人の合作もあります。

また、階段部分には王一停がその昔に上海で関わった有名な政界・財界・文化人・仏教界のさまざまな人たちの写真が飾られています。例えば、横山大観氏や元総理の犬養毅氏、重光元外相、元駐米大使海軍大将の野村吉三郎氏、また、味の素初代会長の鈴木三郎助氏、速水御舟氏、川合玉堂氏、頭山満氏などがあります。中には孫文内閣結成時の王一停（農林大臣）の珍しい写真もあります。

今年で五十二年目を迎える香港園。夕陽会の一員として、これからも地元の皆様と一緒に頑張つて、いつまでも美味しい中国料理を提供していきたいと思つています。

（王 孝安）

ダグラス・マッカーサー最高司令官とアンセルモ教会

現在の地にアンセルモ教会が建てられたのは、連合軍最高司令官であるマッカーサー將軍の助力があったからこそなのです。その経緯は、次の通りです。

一九四六年（昭和二十一年）九月から翌年三月まで、私はアメリカに滞在していました。その間、日本との戦争、および日本占領について多くの場所で講演する機会がありました。講演の後の討論会は深夜に及ぶこともたびたびでした。

ある講演会の後で、一人の紳士が私のところに来て、「明日の朝、私の知人であるパーカー將軍に会う約束を取り付けたので、ぜひ会うように」と勧めてくれたのです。パーカー將軍は第一次大戦に参加し、一九三六年に退役した將軍でした。

パーカー將軍は、私を快く迎えるとすぐに「あなたは、もうすでに『オールドマン』にあったのか」と聞いてきました。私が「それは誰のこと

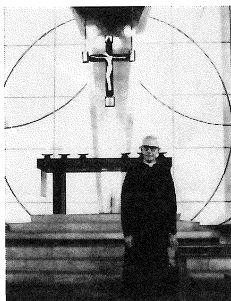
ですか」とたずねると、彼は「もちろん私の親友マツカーサーのことだよ」と言ったのです。

私は自分の耳を疑うほど驚きました。なぜなら、私が彼に会えるなどとは思ってもよらないことだと思っていたからです。彼は「ぜひともマツクに会いなさい。マツク宛の手紙をあなたに持たせてあげよう。彼はきっと喜んで会ってくれるだろう」とつけ加えたのでした。

私が帰日したのは、一九四七年（昭和二十二年）の三月末でした。そして四月九日に総司令部に出向いたので、正面玄関に入ると「マツカーサー司令官にお会いになりたいのですね。ところでどんな御用で」と尋ねられました。

私は「司令官宛の手紙を持っています」と答えると「では私がお渡しします」と言われました。しかしさらに私が、これはパーカー將軍からの手紙だと言うと、彼の態度が急に変わり、すぐに誰かに電話をかけてエレベーターで七階まで私を案内してくれました。

そこではまずホイットニー將軍が私を出迎え、席をすすめてから「あなたはパーカー將軍の手紙をお持ちですね。しかし將軍にいつお会いに



祭壇の前に立つ
ヒルデブランド神父



カトリック目黒教会前（2002年） 写真家 長野重一氏提供

なったのですか」と尋ねてきました。私が日付を告げると、彼は「するとあなたは既に亡くなられた方の手紙をお持ちなのです。パーカー將軍は、ついこの間死去されたのです」と言ったので、私はびびくりしてしまいました。私はそのことを全く知らなかったのですから……。

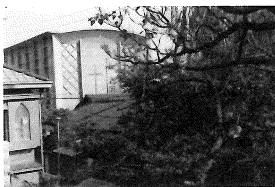
私がマッカーサー將軍に初めて会ったのは、その夜の六時でした。背の高いストイックな容姿の彼が巨大なデスクから立ち上がり、私の方に歩いてきました。彼の顔にはたぐいまれな親密さが漂っていて、目は優しく輝いていました。

私に握手を求めてから、

「ヒルデブランド神父様、あなたは私の親友フランク（パーカー将軍のこと）の手紙をお届けくださった。これは神の摂理に導かれ、私への勇気づけの最後の励ましの手紙であると思います。なぜなら、すでに彼はこの世を去ったのです。この手紙にはあなたが語りたいたいと思っている、いろいろなことが書かれています。どうぞお掛けになつて、あなたがアメリカで語られたすべてのことをお話してください」といつて、ソファーにわたしを導いてくれました。

彼自身は肘掛椅子に腰をおろし、コーンパイプに火をつけ全身を耳にして傾聴しようとする姿勢をとりました。実際、彼はときどき口を挟む程度で、もっぱら私の話を熱心に聞いていました。私は四十五分間彼と対座していました。

あの会見の夜、私を送り出す時、彼は私の右手をしっかりと両手で包むように握りしめ、「ヒルデブランド神父様、もしあなたが私の援助を必要とする時はいつでもおいでください」と言ってくれました。もちろん東京での我々の教会の建設に際しては、マッカーサー将軍はその強力な保護の手をさしのべてくれました。



昭和30年頃のアンセルモ教会

当時の首相でプロテスタントの信者であった片山哲氏は、目黒の格好の場所にあった工場とその敷地を建築用地として私に提供してくれました。ところがこの土地について、占領軍からも日本政府からもいろいろな難題が持ち込まれました。なぜなら、ここはかつての日本陸軍の所有地だったからです。しかしこの問題は、マッカーサーのひと声であっさりと落着きました。

私が最後にマッカーサーにお会いしたのはこの八年後でした。彼はなお明晰で生気にみちていました。別れ際に、彼自身が写っている一枚の写真を私にくれました。それには彼独特の筆跡で「ヒルデブランド神父へ、私の心からの挨拶を贈る……ダグラス・マッカーサー」と書き込んでありました。

柳瀬晃男訳『ヒルデブランド神父自伝―在日50年の回顧―』一九八九年より

(ヒルデブランド・ヤイゼルへアンセルモ教会初代主任司祭)

雅叙園観光ホテル

目黒雅叙園としばしば混同されていた雅叙園観光ホテルは、パークマシオン裏のリパーク駐車場になっているところにあった。戦後、雅叙園はホテル部分を切り出し、松尾國三氏が主に経営を担当し株式が上場されていた。その松尾氏が死去された後、紆余曲折を経て黒い噂の中、倒産の憂き目に会い、ホテルは完全に閉鎖された。インテリアはアール・デコ調を基本とし、壁面を飾っていた装飾やエレベータの扉の黒漆螺鈿細工など印象的で、建物や雰囲気は目黒雅叙園と同じ手による鉄筋コンクリート建築だった。

戦争中は陸軍の病院として徴用され、屋根に大きな赤十字のマークが描かれており、近隣は空襲を受けないだろうと期待されていたが、無差別爆撃には何の効果もなかったという。

戦後は米軍に接収され、朝鮮動乱当時には国連軍のRRセンター（将校クラブ）として利用されていたため、特定目的の女性がドレメ通りを

徘徊し、これに抗議するシユプレッヒコールが響いたそうだ。一方、クリスマスのころには近所の子供たちを招いてパーティーが開催され、サントクロースに扮したアメリカ兵がプレゼントを配ったりもしていた。

建物が取り壊されたのは二〇〇五年のことであるが、戦後長い間、四丁目四番地の路地奥には、観光ホテル地下防空壕からの脱出口がぼっかり口を開けていた。今も地下には階段だけ残っているはずだ。

(佐藤至弘)

杉野学園

ドレスメーカー学院、創立の頃

一九二六年（大正十五年）四月に杉野芳子は東京・芝にドレスメーカー・スクールを開設した。当初三十人の生徒を迎え入れる予定だったが、集まった生徒はわずか三人。やむなく閉鎖を決意したところ、この三人は「洋裁を習おうと思って、今までいくつかの学校を訪ね歩いてきたが、どこでもミシンの使用法に力を入れるだけで、なかなか洋裁を教えてはくれなかった。ドレメでは、最初から型紙で洋服を作ることを教えていただき、どんなに嬉しく思っているかshれない。生徒は自分たちの手で増やすから、ぜひ続けて教えてください」との熱意に打たれ、白金三光町の自宅を教室にして引き続き指導をつづけた。この年の十一月二日、上大崎四丁目（現五番十六号）に新しい家を得て再び開校、杉野芳子は「ドレスメーカー女学



杉野学園本校舎



和服姿で洋裁を勉強している教室風景。洋装が気恥ずかしくて着るためというより、しまっておくために洋服を作るようなところがある頃だった（昭和3年頃）。

院」と校名を変更して授業を開始した。この頃は、震災復興の植音も高く、一般の家でも窓を広くとった洋館風の家が増えてきていた時期であった。

杉野芳子の開校の意図は「家が洋館風になれば衣生活も変わるべきだ。いよいよ日本も洋服に改革される時がきた」「アメリカで身をもって知

らされた洋装のよさを、一般の女性にも知らせて、洋服を普及させたい」というものだった。「日本に洋装を普及したい、洋裁を教え、洋装を広める教育をしたい」この気持ちを貫いて教育を進めていった。

洋装の普及と発展

ドレスメーカー学院は、いつしか「ドレメ」と愛称されるようになり、当初は和服で通学していた学生も、洋装で通学するようになった。教授

法・教材の研究が進み、洋服速成科・研究科・本科・師範科と漸次上級の専門学科を増設し、さらに製帽科も開設した。一九三一年（昭和六年）には東京府認可校となった。

学園創立十周年にあたる昭和十年にわが国で初めて自らの創作によるファッションショーを日比谷公会堂で開催して大きな反響を呼び起こしたことは、昭和という時代を告げる出来事であった。

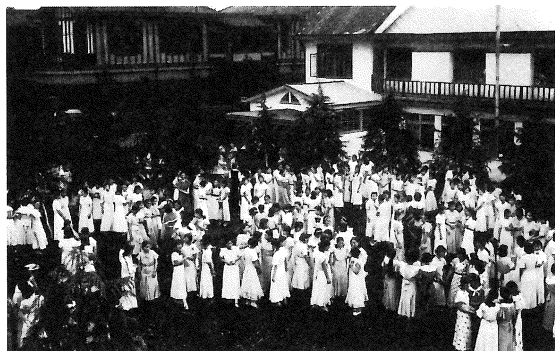
昭和十四年にはデザイナー養成科を開設した。

学生数は増加し、ドレメ通りには校舎（現第二校舎の位置）や学生寮の建物が次々に増えていった。

戦時下から戦後の復興へ

一九四一年（昭和十六年）十二月八日、日米開戦。カタカナで書かれた外国語を敵性語とみなす風潮が強まった。建学の志をそのまま乗った「ドレスメーカー」も「杉野女学院」と改称する。

一九四四年（昭和十九年）に学校閉鎖命令が下った。閉鎖後は分校舎



華やかに装った卒業式後の生徒たち。日本にはまだ手本となる洋服もスタイルブックもない時代から、それぞれの合う個性的な洋装センスが身につくよう指導された（昭和9年7月）。



団服を着て銀座街頭を行く生徒。カメラでとらえられて「朝日新聞」に掲載された。団服は防空服として考案されたオーバーオール形式のスタイルで、院長がデザインし、日常の通学や、勤労報国隊の工場出勤にも着用した（昭和17年）。

を学校工場とし、昼間は作業、夜間に授業を行ったが、一九四五年（昭和二十年）五月二十四日の空襲により、校舎、寄宿舎を焼失し、辛うじて夕陽ヶ丘寮（現本校舎北側）と杉野住宅のみが残った。

一九四五年（昭和二十年）年八月十五日、終戦。空襲警報のサイレン音が消えた東京の空の下に、焼け跡だけが広がっていた。疎開先から帰京した繁一理事長、芳子院長にも再起の方策など立てようもない当時の状況だった。

ところが、それから一週間もたたないうちに、元の学生たちの間から、学院再開を求める声がわきあがった。その声は理事長、院長の心を揺さぶり、情熱をかきたてた。とりあえず門に「一月八日より入学願書受付」と募集広告を貼り出した。志願者はごく少数だろうと、三十枚ばかりの願書を用意した。しかし、翌

年正月明けの受付当日、集まった入学希望者は千数百名。列は目黒駅まで続いて近隣の人々を驚かせた。

理事長は供出していたミシンの返還交渉に奔走し、住宅二階の日本間と夕陽ヶ丘寮を教室にした。ドレスメーカー学院の名に復帰しての再出発である。

再開後、入学希望者が殺到したことを受け、一九四七年(昭和二十二年)に聴講生制度の導入、翌年は夜間部の開設、一九四九年(昭和二十四年)から通信教育科の設置など、さまざまな生活環境にある人たちの受講希望に応えた。この間に、木造による校舎(本校舎、第二校舎、第三校舎、カマボコ校舎、図書館、短大校舎等)を次々と完成させた。さらに、一九五三年(昭和二十八年)以降は、全ての校舎等の鉄筋による建て替えを順次行い、ほぼ現在に近いものになった。

昭和二十年代後半には一万人を超える生徒数を数えるに至った。

短大設立

一九四九年(昭和二十四年)春、「新制高校で洋裁が科目に取り入れら

れて一年。その教育は、専門的な洋裁技術を修め、高い教養を備えた大学卒業の指導者によらなければならない。ところが我が国には、洋裁の大学がない……」と、文部省から服飾教育関係者に養成機関開設への協力の打診があった。

創造性を重視する、洋裁教育の発展には高い教養が大切だと認識していた院長は、迷うことなく短期大学設置に向けて動いた。権威ある教授陣を整える一方、理事長は校地として元高橋是賢邸跡地二、八〇五㎡と興亜学院跡地二、六四〇㎡を譲り受けた。

一九五〇年（昭和二十五年）五月十五日、杉野学園女子短期大学（現杉野服飾大学短期学部）開学。日本初の洋裁関係大学として被服科のみで出発し、その後、生活芸術科を増設する。また、財団法人杉野学園は、短大開設後の一九五一年（昭和二十六年）二月に、学校教育法に基づく学校法人杉野学園へと組織を変更した。

大学開学

四年制大学の開設は、目指してきた大きい目的の一つだった。杉野学

園女子短期大学の設立から十五年目に当たる一九六四年（昭和三十九年）四月、杉野学園女子大学（現杉野服飾大学）が開学。学長に杉野芳子が就任した。

服飾という新しい分野の教育研究を始めて約四十年。初年度の学生募集要項には、「被服に関する専門的知識、専門的技術を学生に修得せしめ、被服関係産業部門の要求する社会的人材を養成する」と、女子教育の最
高学府開学の意図を示している。

服飾教育の展開に先導的役割を果たすための改革

・ドレスメーカー学院の改革

既製服産業が隆盛に伴い、一九六一年「ドレスメーカー養成科」の開設、一九六八年本格的な量産を目的とした「職業科」（現アパレル技術科）を開設、一九八八年（昭和六十二年）全科男女共学とし、ドレスメーカー女学院の校名を現在の「ドレスメーカー学院」と改めた。

二〇〇〇年には、「ファッションビジネス科」「ファッションデザイン科」を新設。時代に求められる学科の充実・改革を進めている。

・大学・短期大学の改革

これまで大学、短大部とも家政学部被服学科だったが、これを服飾学部に変更した。もともと我が国の被服の高等教育は家政学の一分野として始まったものであった。杉野学園は、これを服飾学科として服飾のみに衣替えした専門教育に特化し、服飾を追求する教育内容に組み直し、二〇〇二年、校名を「杉野服飾大学」「杉野服飾大学短期大学部」と改称した。同時に男女共学とした。

・学園のエクステンション活動および生涯学習への対応

一九七四年学院に「フレックスタイム洋裁科」開講。一九八七年には生涯学習時代に向けて公開講座・オープンカレッジを開講。

一九九七年、杉野学園のホームページ (URL <http://www.sugino.ac.jp>) を開設。

二〇〇〇年、全国洋裁デザインコンテストを第三八回より「全国ファッションデザインコンテスト」と名称変更し、第二部（デザイン画の部）を新設。

・国際交流の推進

二〇〇〇年、学園と中国の浙江工程学院（現浙江理工大学）が友好協定を締結。

二〇〇二年、モスクワ国立繊維大学と日露服飾協力協定を締結。

二〇〇二年、イギリスのサリー・インスティテュート・オブ・アート & デザイン大学（現 University College for the Creative Arts）と学術交流協定を締結。

・校舎等の新築

二〇〇二年、杉野服飾大学附属図書館オープン（四丁目六番九号、元南桜館の土地）。

二〇〇三年、第二新校舎竣工（四丁目五番十三号、第二校舎西側）、第六校舎竣工（杉野記念館東側）。

（杉野秀子）

杉野記念館

杉野記念館は、杉野学園創立者である杉野繁一・芳子夫妻の旧居であった。

杉野繁一・芳子の逝去に伴い、杉野学園に遺贈され、杉野記念館としてその足跡を後世にとどめていくこととなった。

現在館内では、「杉野芳子―モードの遺産展」「写真展」等を行っている。

当初を振り返れば、昭和十三年四月五日、杉野繁一・芳子の新邸は庭の桜が爛漫と咲きほこる中で新築披露が行われた。

杉野繁一は、『杉野学園四十年史』に次のように感慨を述べている。

「ドレメの歴史の上からみて、この邸はさまざまな意義をもった。今まで学校と住宅が同じ屋根の下にあったが苦節十



杉野記念館

年というが、われわれは苦節十三年で初めて住宅をもった。それまで満足な住宅もなく仕事の中に起き臥して、学校発展に全力をあげて来た。さらに本邸は戦災をまぬがれ、昭和二十一年ドレメが戦後の再出発をしたとき、教室に用いられている。復興の基点として、本邸のはたした役目は実にはかり知れないものがある。」

杉野芳子は『杉野芳子 炎のごとく』に以下のことを記している。

「教授内容の刷新と充実を期する為に昭和十二年夏から十三年春まで欧米に外遊した。帰国し東京に着いて車から門前に降り立って、目の前に実際に見た住宅は、身の程をわきまえて決して豪華ではなく、品格のあるどっしりと落ち着いたものでした。お前が口出しするとうるさいから、外遊に賛成するんだ」主人は出発前に冗談口をたたいていました。私が以前に口出したのは、校舎や学生寮だったからです。とにかく主人は、自分の力量と好みを生かして、年を経るごとに重みと光沢を増す住宅を完成したのです。家の内部も申し分ないものでした。地味だけれども光り輝く風格がにじみ出ている、軽薄さのみじんもない、いぶし銀のような落ち着き。しかもスタンフォード大学で学んだ専門技術の

上に、重ねてきた体験と熟練した腕と新知識を思うがままに生かして、採光、換気、間取りなど、合理的に工夫されているのです。

“これでやっと、われわれは家を持つことができたね” 玄関を入ると主人は言いました。

私財を注ぎ込んでドレメを発展させてきた私たちには、自分の家と言えるものさえなかったのです。“やっと家が持てた”と軽い調子で言った主人の言葉を、私は、ズシリとした重みで受け取りました。」

空襲の火から守り抜いて漸く焼失を免れ、戦後一時期は、進駐軍に接収されて、米軍の将校が住んでいたこともあった。戦時を越えて無事であったこの住居を、杉野夫妻はよりどころとし、大切にして生涯を送った。

杉野記念館は、一九三八年（昭和十三年）建築以来、七十年近い星霜を経てドレメ通りの中では、昭和の雰囲気伝える数少ない建物となった。

二〇〇二年（平成十四年）、杉野記念館・本校舎の万年塀を取り払い、敷地の一部を歩道に提供した。これによって広々として景観も明るくな

ったばかりか、ドレメ通りの通行も道幅が広がり、行き交いも快適になった。道路とキャンパスの間には見通しのきくフェンスを設け、校庭やアトスペース（第二校舎展示室）、ギャラリート（第五校舎）などの展示を見ながら歩ける心地よい道筋になった。

（杉野秀子）

杉野学園衣裳博物館

杉野学園衣裳博物館は、学園の創立三十周年を記念し、日本で初めての服飾博物館として一九五七年（昭和三十二年）に開館した。博物館相当地の認定を受けている文化施設で、一般公開している。

当館は、学園の創設者である杉野繁一・芳子夫妻が、欧米諸国を訪れた際に蒐集した実物資料が所蔵品の主流をなしている。中でも「目で見える西洋服装史」をテーマとする常設展示が特色となっている。

また、さまざまな衣服形態を有する日本の時代衣裳や世界各地の民族衣裳、和洋の手芸品、古代裂、時代織物なども合わせて展示しており、衣文化の理解に貢献している。

開館に当たって杉野芳子は次のように述べている。

「渡欧した際現地で各時代の実物の衣裳を見て、その時代の裁断、服飾手芸、制作の技術など手にとって見られ、得がたい勉強になる。フランスの著名デザイナーがデザインを創作する源泉はここにあると思っ

た。その幸運に恵まれた彼の地のデザイナーの境遇を羨むのみではなく、その資料をコレクトして我が国のデザイナーに紹介するのが私のつとめではないかと自覚し、この博物館は数年前から構想し、視察旅行は時代衣裳の蒐集を兼ねていた。ことに昭和三十年の渡欧は主として時代衣裳コレクションの旅であった。蒐集にあたってパリを中心とする諸地域をめぐり、さらにオランダ、スイス、フランスのブルターニュ地方に旅を続けた。こうして蒐集した衣裳を何点か持ち帰って展示資料とした。」

学園では、一九七三年（昭和四十八年）には大学に学芸員課程を、一九八一年（昭和五十六年）には短大部に学芸員基礎課程を置いた。学芸員は生涯学習社会における社会教育を推進する博物館専門職員で、国の認定を受けた博物館で実習を行うことが定められており、当館は学芸員養成の場としての役割を果たしている。

そして、二〇〇五年（平成十七年）に、企画展や博物館実習を行うために衣裳博物館分館を開設した。

（杉野秀子）



杉野学園衣裳博物館

日本で最初の撮影所、目黒ガラス・ステージ

私が尊敬する映画史研究家田中純一郎氏の著書『日本映画発達史』に、次のような記述がある。

日本映画の歴史はすべて輸入からはじまった。輸入も機種や系統が多種で経緯も複雑だった。一八九六年（明治二十九年）十一月神戸に輸入上映され、皇族方がご覧になったという「神戸又新日報」の記事がある。これが日本映画の歴史の始まりとされている。

一九〇七年（明治四十年）、常設の活動写真館が増え、吉沢、横田のような映画業者が活動写真スタジオの建設を企画していた。吉沢は横田よりも若干資本が豊かで、企業的にも先んじていた。

吉沢商店目黒撮影所・吉沢商店（社長・河浦謙一）の撮影所は、敷地を、東京目黒の行人坂という坂の上にあった店主の別宅を中心に、隣接の南部原とよばれた一万二千坪ばかりの空き地に求め、一九〇七年（明

治四十年）九月に計画をたてて翌年一月二十日、ガラス・ステージ（間口四間半×四間Ⅱ一七・六坪の長方形で、屋根と周囲はガラス張りで東と南側の下半分は、カメラの引きを考えて板戸が自由に取り外せるようにした。設計は河浦謙一）一棟を完成させた。

『日本映画発達史』は、田中純一郎氏が新聞などの資料を丹念に収集して編纂した労作である。先生の郷里群馬県新田町には記念館があり、これが評価されて勲四等授章された。

上大崎四丁目に日本最古の撮影所があったという、伝承を実証する目的であるから、今回、この記述を参考としたい。

まず場所の特定であるが、行人坂上とある。上大崎四丁目の通りから目黒川に至る坂を何と言うのだろうか。父からは「ドレメの坂」と教わっていた。この坂の呼称を古い人に訊ねると「槍が先の坂」と呼んでいる。つまり、この坂の確かな呼称はないように思う。そこで一番近い行人坂にしてみましたのではないだろうか。

次に隣接する南部原とよばれる一万二千坪の特定だが、四丁目入り口

の三井住友事務センター（二〇〇六年現在開発中）が約七〇〇坪である。この一七倍の土地は行人坂上には見当たらない。

昭和十年代には、三井住友事務センターの所は原っぱで、現在の「とんき」の所にカフェ「エミリヤ」、菊地さんという不動産、電話取引のお店や神谷さんという工場、ハネダ写真館などがあつて雅叙園の入り口の坂になる。その奥は大谷石で造成された宅地が雅叙園の通りまで続いている。

一方、四丁目の入り口は美川、竹島さんと邸宅が続き、行人坂は川崎（香港園）さんから大圓寺で終わってしまう。権之助坂は林たばこ、お菓子店と和菓子とかき氷、汁粉などを扱う三好野という甘味処で、次は久米さんの大邸宅が日の出女子学園の入り口まで続くので、そんな大きな空き地は想像できない。

結局、坂の呼び方の違いで惑わされてしまう。そこで現・杉野学園第三校舎、元・高橋邸を考えると、ここを起点にして一万二千坪となると坂を下って本多電機の先までになるうか。ここならば一万二千坪の土地がイメージできるというものであろう。しかも昔、本多電機の場所に植

物園があり、檻に孔雀が飼われていた。

ある日、私が撮影所のことを母親に聴くと、杉野学園第三校舎の所に河浦さんというお屋敷があったという。大変なお屋敷で、八百屋、魚屋、酒屋などがご御用聞きに行くと、「今日は何が入荷しますか」と聞かれる。

手板（品物の名前とか値段を表示する木の薄い板）に今日入荷したものを書くと、それをお手伝いさんがお盆の上に乗せ、奥さんの部屋に持って行って注文をいただくという、映画の時代劇のような様子を踏襲していたという。

また、四丁目は政財界のすごい方が住んでおられた。なかで自動車を持っていたのは河浦さんだけだと言っていた。元の杉野学園西睦寮の所に車庫があり、母はそのナンバーまで記憶していた。

田中純一郎氏の『活動写真がやってきた』という書籍に、氏が河浦氏を追って目黒撮影所の所在を確定しに上大崎四丁目を実際に調査している。

国電目黒駅の南側へ出ると、左側に三井銀行の支店があり、裏に目黒

のお不動様に通じる坂を行人坂という。明治四十一年一月二十日に吉沢商店が行人坂上に撮影所を建てたのは、河浦氏の手文庫から出た大福帳に建前の祝いの出費の記載でわかった。

当時はあの辺一帯を南部の原といい、一面の山林と田畑だったのを、河浦氏は前年九月に、坂上の三千坪を別荘用に買い、それに隣接して現像所を造り、つづいてガラス張りのスタジオを建てた。河浦氏は日露戦争のフィルムを持って渡米の際、エジソン撮影所を見学、それからヒントを得て設計したという。

このスタジオから別荘につづき、さらに坂下の一万二千坪ほどの山林、田畑を、持ち主の農家から地代の二倍を払って借り受け、ここを野外撮影所（オープンセット）用に使ったといわれる。

戦後になって、私は有志の友人たちと、その場所を確認しておこうと思ひ、昭和三十年四月十日の朝、河浦氏の息子前島誠一氏、当時を知っている映画監督吉野二郎氏、映画研究家帰山教正氏たちと目黒駅に集合。桜が舞う強風と砂埃のなか、前島氏に従って、



目黒ガラス・テージ

行人坂を少し進んだ左側の（料亭「香港園」の前）道を、五反田の方面に五〇〇mばかり行くと、下り坂になろうとする左側に喜多六平太記念能楽堂があり、右側に杉野学園図書館があり、その隣に一〇〇坪ばかりの空き地がありました（その後、その空き地も杉野学園の建物になっていく）。そこがわが国最初の映画撮影所であったところで、奥まった一角に大きな楠木があるのを、前島氏はたしかに見覚えがあるといっていました。

楠木の傍の垣根を通して隣家が見えましたが、それが河浦さんのいう別荘の建物で、新派悲劇の背景などに、その庭園がよく使われたというので、私たちはさらに興味を増し、表通りから遠回りして、その家を訪ねると、御主人は東京大学農学部名誉教授・東條健二氏といい、快く庭内を見せてくれました。撮影所の跡とは知らず、分譲地として購ったのだそうで、河浦さんは、高橋是福氏（後の大蔵大臣高橋是清氏の弟）に譲ったと言いましたが、さらに分譲地として売り出されたのでしょうか。

私は、念のため河浦さんから贈られた、別荘の建物を背景に野外撮影をしているスナップ写真を持参したので、それを現在の庭園と照合して



東條邸庭

みると、スナップに写っている池や、松や、石灯籠、藤棚などが、そっくり元のままの位置にあるではありませんか。五十数年後の今日まで、こんなにも原形そのままに残されているのを見て、私たちは奇蹟にあつたような気がしました。

前島氏は、感慨深そうに、目黒川を越えた前方に眼をやり「ここから向こうを見ると、桐ヶ谷の火葬場の煙突の他は家がありませんでした」と言っていました。その時の模様は、同行の朝日新聞記者により、翌朝の同紙都内版に、写真入りで大きく報道された。

河浦謙一氏は明治元年、富山県の寺の生まれ。上京して神田区紺屋町の知人の吉沢家に寄食し、幻灯機、浮世絵、郵便切手類の輸出販売などを手掛けていた。商売は順調で銀座二丁目（明治屋付近）に店を持ち、明治二十七年には、新橋金六町に三階建ての建物を陳列所にして、浮世絵、骨董の輸出業務に励んだ。

この新橋の店に出入りしていたイタリヤ人が、シネマトグラフを持ってきたのが明治二十九年の暮れか、三十年の正月のことです。

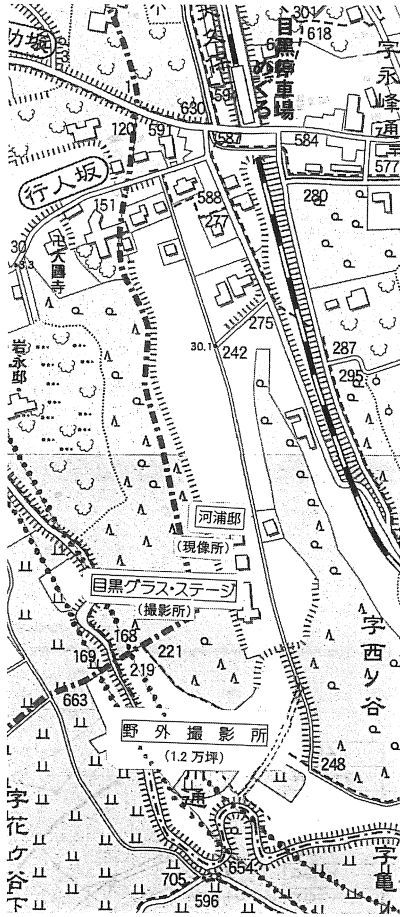


目黒撮影所にあった石灯籠

あった。三十年の二月十五日、大阪戎橋南地演舞場で初公開した。しかし、輸入者は京都の稲垣勝太郎という個人だった。

その後、吉沢商店は目黒のスタジオで日比野雷風の剣舞、川上音二郎一派の喜劇「和洋折衷結婚式」などを制作、浅草の電気館で公開した。文芸顧問に佐藤紅緑を迎えたり、飛ぶ鳥を落とす勢いがあった。

さて、近年発行された佐藤忠男氏の『日本映画史』には次のように記されている。



1910年頃 (明治40年過ぎ)



撮影所倉庫

日本で最初の撮影所をつくったのは吉沢商店である。一九〇八年（明治四十一年）、東京目黒の行人坂にガラス・ステージ一棟が建てられた。照明がまだできなかったので、太陽光線で撮影するために、温室のようなガラス張りのステージを必要としたのである。

ただし、ごく小さなもので、八畳敷の座敷を一つ建てたらカメラの引き（被写体との距離）がなくなつて困る、といった程度のものであった。このステージができる前には、五年間ほど、同じ場所でテント張りですつと撮影が行われたという。

ここでも、やはり行人坂と書かれていた。

（半場 茂）

〔参考文献〕

田中純一郎『日本映画発達史』中央公論社、一九五七年

田中純一郎『映画館がやってきた』中央公論社、一九八五年

佐藤忠男『日本映画史』岩波書店、一九九三年

目黒川の桜

夕陽丘を南へ下っていくと、今では都内の桜の名所のひとつとして数えられている目黒川の桜並木に行き当たります。

私がここに移り住んだ一九七〇年ごろは、まだ川堤に沿って若い桜の苗木が植えられたばかりでした。三十有余年たった今日に、このような素晴らしい桜並木になるとは想像もつきませんでした。ドレメ通りから目黒川に向かった急な坂を右に曲がったあたりから桜のトンネルが始まります。目黒川の遊歩道が避難道路として開通したのも同じころだったと思います。

秋の落葉とともに出現した新芽が淡い桃色に色づき始めると目黒川の春が始まります。皆さんが華やかに開花した桜の花に興ずるころ、川面には花筏、地上にはつくしんぼが顔を出し、ツツジやレンギョウなど春の花々が競って咲



本多電機の通り（2000年）写真家 長野重一氏提供

き始めます。

燃えるような新緑が深緑に変わり、強い日差しを遮ってくれるところ、遊歩道の折返し点、中里橋近くの中目黒公園では百花繚乱し、まさに都会のオアシスとなります。

やがて秋、桜の紅葉が始まり、桂の落ち葉の甘い香りとともに素晴らしいハーモニーを奏でます。そうして枯れた落ち葉のカサコソという音とともに一年が終わります。

夕陽会の散歩コース、目黒川の遊歩道にぜひ足を運ばれてはいかがでしょうか。

(鴻田次章)



目黒川の桜

目黒雅叙園の文化

太鼓橋横の正面入り口を考えると、目黒雅叙園は四丁目から遠いように感じるが、夕陽会会員の西端一列は境界線を接している家が多い。実はドレメ通りに通じる道が二つある。ひとつは教会司祭館前に入る路地奥だが、避難路として確保されているため、常時閉まっている。有名な百段階段の最上段の間の南だ。もうひとつは最近開通したのだが、ドレメの第二新校舎（熊野邸跡）の西側に誰でも通れる路が密かに眠っている。庭園を回遊式に下っていくと滝の裏に出る。

百段階段は、大圓寺の南側を行人坂と平行に各部屋が建てられ、七つの部屋が六つの階段で結ばれている。その階段が合計九十九あるため、百段階段と呼ばれている。今では国の保存建築登録有形文化財であるが、長く宴会場としては使われなくなり、従業員宿舎として使われていたこともある。映画『千と千尋の神隠し』のお湯屋「油屋」のイメージモデルになったといわれており、季節により見学会が開催されている。



宿泊、客室



登録有形文化財、漁樵の間



登録有形文化財、百段階段

「昭和の竜宮城」といわれた木造旧館が取り壊され、一九九一年（平成三年）に新築された際に、百段階段だけは唯一原形のまま残され修復された。目黒川沿いにあった長い廊下で繋がった小宴会場建物も同様の造りであったが、敷地は、防災・散策のための桜並木路として国に提供され、痛みの激しい建物本体の移築は断念された。

旧目黒雅叙園は、一九三一年（昭和六年）石川県出身の細川力蔵氏が純日本式料亭「芝浦雅叙園」をベースに、庶民のお大尽遊びが可能な夢の場所として、現在地に日本料理・北京料理の料亭を展開した。

料亭・宴会場だけでなく旅館、百人風呂、千人風呂、結婚式場などを増築し、今でいう健康ランドと
いうか明治時代に流行った再生
温泉の高級版というか「憩い・
癒しの空間」を目指し、豪華絢
爛・数寄屋造りの贅を凝らした
という。

鏑木清方・横尾芳月ほか三十

名以上といわれる大正・昭和の画家たちの力作や、江戸職人技最後の集大成といわれる建築・彫刻が織り成す装飾の華やかさが、竜宮城と言わしめた。漆螺鈿細工をはじめとして、これらの一部が新築された雅叙園のあちらこちらにはめ込まれており、往時の華やかさを今に伝えている。また絵画の多くは美術館（閉館中）に收藏された。

ちなみに、当時小僧として参加していた大工さんから聞いた話のまた聞きだが、普請場は今の目黒川新橋あたりの右岸にあったらしい。伊豆の大工の棟梁を頭に、彫物師・表具師・漆喰職人などが寝食をともにしていたという。細川氏はいつも後ろ手に手を組み、楽しそうにそうした職人の作業場を歩き回っていたという。

（佐藤至弘）

大圓寺

縁起によると、元和年間（一六一五〜二三年）ごろ、奥羽湯殿山大海



法印修験僧が大日如来を奉じて、現地に開基したのが始まりという。多くの修験僧が入り出したため、前の坂道が「行人坂」と呼ばれるようになったとも言われている。その後、伝教大師作と伝えられる大黒天が祀られ、ご利益あらたかな江戸三大黒天としても有名になった。

一七七二年（明和九年、メイワク、迷惑）大圓寺から出火。江戸の三分の一を焼く大火となった。そのため、幕府は七十六年間再建を許さなかった

が、一八四八年（嘉永元年）に再興された。焼け跡には大火で犠牲になった人々の霊を慰めるため、五百羅漢像が石造りで並べられていたが、再興時に左側に移された。近年、川崎邸新築時に東側の崖を作り直し整備整頓されている。

諸説紛々の八百屋お七伝説。恋の相手は生田庄之助か吉三きちざかは知らねども、悲恋物語にかわりあるまい。駒込の大円寺説や年代が合わないこともいろいろあるが、お七処刑後、吉三が剃髪して西蓮上人となり、修行・托鉢し浄財を集め、行人坂を石畳に舗装し太鼓橋を石造りに変えたという。興味のある方は現地に足をお運びください。

（佐藤至弘）

目黒さつき会館

時代の流れとともに機関車会館、動力車会館と名前は変わってきたが、名前が示しているように、れつきとした国鉄機関士労働組合の牙城であった。旧国鉄用地に木造の組合事務所ができたのは、一九五一年頃らしい。

国鉄の労使争議が激しかった頃、山の手線の窓から赤い闘争旗がよく見えたものだ。入り口左側には、C5515のナンバープレートと機関車の動輪が、モニュメントとして力強く置かれている。

現在は財団法人日本鉄道福祉協会の資産として、貸し会議場、宿泊など多目的に運用されている。

(佐藤至弘)

